



琉球大学学術リポジトリ

University of the Ryukyus Repository

Title	教師の苦勞と喜び 学生による聞き取りをとおして
Author(s)	藤原, 幸男
Citation	琉球大学教育学部教育実践総合センター紀要(10): 91-97
Issue Date	2003-03
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/5711
Rights	

教師の苦勞と喜び

——学生による聞き取りをとおして——

藤原幸男*

Effort and Joy of Teachers

——through Interview with Teacher by Student——

FUJIWARA Yukio

はじめに

2002年度後期の「教職研究」（「教職の意義に関する科目」に該当する授業科目）で、受講者たちに、「教師又は教師以外の教育関係職に従事している者に対して聞き取りをする」という課題レポートを出した。

レポート内容は、①インタビュー記録的にまとめる、②インタビュー対象者（たとえば小学校教諭<〇歳>）を明記する、③仕事内容、この仕事についての動機、苦勞とやりがい、取材を終えて（感想）の項目で書くことを要求し、④分量はA4用紙（40字×30行）2枚でまとめることを指示した。

レポート課題を出す前に何本かのビデオで学校現場での教師の生の姿を紹介してきたが、それはどんなに衝撃的・感動的であっても間接的なものにとどまり、自分との関わりが弱いといわざるを得ない。それで、受講者のつながりのある、あるいは身近な人に聞き取りをすることによって、教師の姿を自分との関わりで実感としてとらえるとともに、教師像を再構築する機会をつくりたいと考えた。

なお、このような学生による聞き取りの試み

は、すでに「教職の意義に関する科目」に該当する授業科目のなかで実践されている。⁽¹⁾最近でも、高野和子「教師のよこび再考——学生による聞き取りを通して——」、『教育』2003年1月号で報告され、学ぶことが多かった。私の試みは、この先行実践を実験的に追実施したものである。1000人以上の聞き取り記録から論じた高野和子の報告にも学びながら、提出された学生35名のレポートを検討したい。

なおレポートのインタビュー対象者には、学校教師では小・中・高校以外に小学校養護学級担当、高校実習助手もいたし、それ以外の教育関係職従事者として学校図書館司書、保育士がいたが、それらの人数が少ないこともあって以下では小・中・高校の教師に限定し、それぞれに分けてみていきたい。

1. 教師の仕事

(1) 小学校教師

小学校教師の場合はほとんど学級担任であり、授業は、専科（音楽・図工）以外は一人で担当する。授業以外に、掃除、給食指導、宿題・日記のチェック、テストの採点などがあり、子

*琉球大学教育学部

も同士のけんかの仲裁をしたり、悩みの相談にのったり、学級行事のとりくみを指導したりする。最近では、総合学習などで学年の先生方と話し合っただけで教材研究をすることも多い。校外学習が必要になれば、行き先となる工場や施設への交渉をしに行く。これ以外に、学級事務（学級費の徴収、教材の発注、支払い）、各種統計・報告がある。また研究指定校になれば校内研究を計画的に進め、公開研究授業とその検討会などで忙しい。学校運営のための校務分掌もある。校務分掌は学校規模にもよるが、体育主任、安全主任、保健主事の3つを担当している人、研究主任を担当している人もいて、その仕事の種類と質・量は多様である。時期によっては、教育実習生の受け入れと指導がある。

時間的には、朝7:30には出勤し、おそくまで学校にいるし、仕事を家に持ち帰ることもしょっちゅうある。多忙なのだが、「教師の仕事は本人の気持ちしだいで減らして楽することもできるし、やれば切りがなく続く」という。

(2) 中学校教師

担当教科の授業以外に、宿題のチェック、テスト準備、テスト後の成績処理、部活の指導（休日返上で部活にでる）がある。中学校の場合、学級担任は少なく、学級担任でなければ比較的楽である。そのほか、校務分掌など、小学校と同様な仕事があるが、インタビュー対象者はそれについてあまり触れていない。

(3) 高校教師

専門教科を教えるのだが、その仕事は普通高校、専門高校の種別によって、また進学校か非進学校かによって、また教科によって異なる。授業と関連して、進学校であれば進学のための早朝講座、専門高校であれば各種資格・検定のための講座、それと関連した行事（商業高校では「校内実務競技大会」）をおこなっている。そのほか学級担任になると、とくに3年生担任は進路指導など年間計画にしたがって3者面談、調査書の作成など大変な激務になる。部活顧問になると休日もでて生徒に付き合う。また、小

中学校と同様に校務分掌があり、「『教える以外の仕事』が非常に大きなウェイトを占める」。「時間がたりない」し、「自分の時間が持てない」という。

2. 教師の苦勞とつらさ

(1) 小学校教師

一つには、子どもとの距離のとり方、指導と自主性尊重のバランスである。ある教師（30代）は、「最初は苦勞ばかりしていました。新任の頃は、わかってもらおうと、ただただがむしゃらに自分をぶつけて、からまわりばかりしていました。あのとときの、自分と子どもとの距離、つうじあっていないという感覚が一番つらかった」と述べている。

二つには、努力が報われないことである。ある教師（50代）は、「子どもにどんなに一生懸命に教えてもそれが実を結ばないこと」だといっている。さらに、「教師のやることを子どもの親が理解してくれないこと」、「子どもを少しでも叱ると理由も聞かずに苦情の電話や手紙がくる。探し物を『自分で探さない』といっただけでも文句を言われてしまう」という。

三つには、仕事がどんどん増えて、授業準備のための教材研究の時間がとれないことである。ある教師（50代）は、「教育一般の事務や生徒指導などほかの仕事が多くて、教材研究の時間がなかなか取れない」ことをあげている。また、「パソコンなどの新しい機械の導入についていけない」、「英語学習もそうです。とても苦勞するのが外国人の先生とのコミュニケーションです。私の英語力の貧しさや、コミュニケーション力の貧しさを実感してしまい大変です」と述べている。

(2) 中学校教師

一つには、生徒の問題である。ある教師（20代）は、「いじめや自殺の問題、不登校の問題、キレル生徒の問題で悩んでいる。とくにキレル生徒には、教師もストレスにさらされるなど問題が大きい。……キレル生徒に対して教師の

ほうがキレて暴力沙汰になったケースも少なくない」と述べている。別の教師（30代）は、「疲れからくる苛立ちで生徒との関係が険悪になったり、自分の気持ちがあまく伝わらず生徒に誤解されたり、授業妨害する生徒を注意したら罵声を浴びせられるなど」をあげている。

二つには、うまく教えられなかったときである。ある教師（30代）は、「授業に関しては、やっぱり生徒に伝えたいことが伝わらないときだよ。みんながわかろうとしている目は教壇から見ていてわかるのだけど、どうしても伝わらないときがあるんだよね。僕もいろいろ工夫するんだが、あれにはまいっちゃうな」と述べている。

三つには、教員同士の人間関係である。ある教師（30代）は、「自分の仕事しかなしないで、ぜんぜん協力的じゃないやつが多すぎる」と言っている。

(3) 高校教師

一つには、生徒のことである。ある教師（20代）は、「『子どもの心を理解する』って言うんですけど、やっぱりわからないことが多くて、苦労します。……逆切れする子も多いし、授業妨害する子、自分たちは学校に遊びに来ていると思っているような子もいます。それと、生徒とやりあうっていうのが私はまだできないんです。『生徒のことを理解したい』と思ったら、生徒と同じ目線に立たなければならないのですが、同じ目線に立ったらやりあったときに衝撃が大きくて、じゃあその衝撃を小さくするためには？という、一歩引いて結局上の立場から『子どもでしょ！』とみてしまい、理解しようとしなくなるので、この辺が自分では難しいです」と述べている。

同じようなことだが、別の教師（20代）は、生徒との付き合い方・距離のとり方に悩んでいて、「別の先生に相談したところ、『生徒にはあまり近づきすぎないほうが疲れないよ』と言われたのですが、まだ納得していません。今のところ、生徒とどの程度関わって、どの程度『本当の自分』をだしていけばいいのか、が課題で

す」と言っている。

またある教師（20代）は、「現在は学級担任をしていないので、ほとんどの生徒とは、週2～3時間の授業の中でしか会うことはできません。このような状況で生徒と自分の間に信頼関係を築くことはとても大変なことだと思います」と述べている。

二つには、授業のことである。とりわけ高校では進学校と非進学校では事情が大きく異なる。進学校の場合、「どうしても受験を前提にした授業になるので、国語を受験科目の一つとしてしかとらえていない生徒が多く、国語の楽しさを教えることがむずかしい」（50代）と言っている。また選択制が広がり、たとえば地学の授業時数が少なく、「本当に地学が不要なのか、本当に面白くないのか」と思ってしまう（20代）と言っている。

三つには、職場の教員との人間関係をあげている。「人間関係はむずかしい」、「信頼関係を結ぶまでが大変」と言っている。

3. 教師の喜びとやりがい

(1) 小学校教師

一つには、子どもと通じ合えたときである。ある教師（30代）は、「やりがいは、自分がその子に誠意をもって尽くしたことが身を結んだのを感じたとき」で、その子に働きかけて、「少しずつ本人が理解し、心を開いて、できなかったことに挑戦できるようになったとき、そのことを子どもと一緒に喜べること」をあげている。

また別の教師（30代）は、学びにおける通じ合いをあげ、「教育という仕事は、先生が生徒に教えるという性格が強いと思われがちですが、本当に喜びを感じる時は、先生と子どもが共に学んでいる、一緒になって勉強し理解を深め合っているときなんだという気がします」と述べている。

二つには、教えることが成果をあげたときである。ある教師（30代）は、「授業で、子どもたちによりよくなってほしいという思いが子ども

もに伝わり、反応が返ってくるのが一番のやりがい、「『授業がおもしろかった』『もっと勉強したい』といった子どもの声が休み時間や日記で返ってきたとき、そう感じる」と言っている。別の教師（20代）は、「跳び箱5段を跳べるようになる、むずかしい計算を解くことができるようになるなど、子どもたちが何かを達成したときの満面の笑顔を見たとき『ああ、教師をやったよかった』と思います」と語っていた。

ある教師はうれしかったエピソードとして、次のことをあげている。

「新任の年に受け持った子どもの中で、3年たったいまでも手紙を送ってくれる子がいる。ある日、その子から一通の手紙を受け取った。私は朝の会で、絵本や童話を読み聞かせていた。自分の気に入ったものの紹介で朗読できるという理由だけで、授業より子供たちの受けがよいので何の効果も期待せず軽い気持ちで続いていた。それが彼にとって最高の時間だったようだ。『いままで本はつまらないと思っていた自分がうのように図書館に通い、友だちと先生が知らないおもしろい本を探そうと躍起になった。さらに朗読も練習し、練習をすればするほど、読解力も身につく、国語の成績もその頃から上がってきた。すべて先生のおかげです』というその一文を読んだとき、すごくうれしかったと同時に、思わず赤面し自己満足でやっていただけの自分がすごく情けない人間に思えた。3年たっても満足な授業ができず、毎日を何となく過ごしていた私はすっかり落ち込んでいたが、子のこのためにも、これからの子のためにも本物の教師になろうと思った」

(2) 中学校教師

多くの教師が授業内外での通じ合いをあげている。ある教師（20代）は、「授業以外の時間に私を訪ねてきて、質問を受けたときは『頑張って授業をちゃんと聞いてくれてるな』とうれしく思う。また、行事のときに生徒たちと接していて、思い通りにちゃんと動いてくれたときや、『心が通じ合った』と思える瞬間があるときは教師になってよかった、と感じる」と述べている。

別の教師（30代）は、「それでも教師を続けていられるのは、苦しいことばかりじゃないからなんです。『きょうの授業は楽しかった』って一人でも言ってくれればうれしいし、私を頼ってきてくれるのもうれしいし、スーパーで声をかけてくれたり、年賀状をもらったりだとか、ほんとちょっとした単純なことで先生やってよかったと思います」と述べている。

(3) 高校教師

一つには、不登校・問題を抱えた生徒を励まして卒業させることができたことをあげている。「なかなか登校してこない生徒に対しては、1対1でしっかり話し合いをして問題を解決する方法を共に考えたり、学校に来るように説得したりして、その結果、無事に卒業できた生徒もいます。……そのような生徒を卒業式で無事に送り出すことができたときには、この仕事をしていてよかったと思います」（50代）と言っている。高校の場合、義務教育ではなく、途中で退学する生徒も多い。そのなかで、共に悩み、共に考えて、卒業にまでいたったことは、大きな喜びといえよう。

二つには、上記と関連するが、子どもの成長の姿に触れたときである。ある教師（20代）は、「成長過程を目の当たりにしているの、生活態度が崩れていた子がよくなっているのを見たら、人間に対して肯定的な視線を育てていけるとともに喜びを感じることができると思います。それと、ハードな仕事のなかで忘れていた思いやりを見せてくれる子に出会ったときには感動しますね。私たちの仕事は、いろいろなドラマを見ていると思うんですよ。その分、視野も広がりますね。あと、自分では思ってもいなかったことで光をつかんでいく子どもがいる。これは感動です」と述べている。

別の教師（50代）は、「やりがいですが、これは苦勞以上にたくさんあります。一番やりがいを感じる時は、高校生の純粋さに触れたときです。大人に大して不信感を持っている生徒とコミュニケーションをとったとき、そこに一つの純粋さを見つけることがよくあります。…

……どんなに反抗的な子にも必ず純粋な面はあ
るのです。この年齢にはこの年齢の純粋さがい
つの時代にもあり、これは普遍的なものとして
昔と変わりません。そういう意味での安堵感が
あります。子どもを身近に感じることによって、
ひとつの自分自身の生きる喜びにもなるのです」
と述べている。

三つには、授業の事である。ある教師（30代）
は、「授業中に生徒がわかったという顔をした
ときがもっともやりがいを感じる」と言ってい
る。別の教師（50代）は、「中学時代まで国語
が嫌いだっただ生徒たちに、文学の深みや楽しさ
に目覚めさせることができたときにやりがい
を感じます」と述べている。

四つには、生徒との卒業後のつきあいである。
ある教師（30代）は、「卒業した生徒から手紙
が来たり、同窓会に招待されたりしたときの喜
びは大きい。先生と生徒ではなく、個人と個人
で話をして元生徒が成長している姿を見るのも
やりがいの一つだ」と言っている。別の教師（5
0代）は、「きょうのように何年かたって教え子
が訪ねてきてくれたときですね。私のことを覚
えていてくれているんだなと感じて、すごくう
れしく思います」と語っている。

4. 教師の転機と再出発

インタビューした教師には、途中で学校をや
めて一般企業に勤め、また教師になった人もい
る。そこから、教師の喜びとやりがいも改めて
読み取れる。ある教師（50代）は、次のように
語っている。

「一時期、学校を離れて会社勤めをしていた
ときがありました。最初に勤めた学校は生徒の
心を無視した生徒指導をしていたのです。指導
される生徒に恥をかかせるようなやり方は、あ
る種のいじめにしか見えなくて、とても理不尽
に感じられました。さらに、一日中掃除をさせ
るという指導にも、学習する権利を剥奪してい
ると思いました。それでこの学校は1年で辞め
ました。そして、2、3年くらい会社勤めをし
ていたのですが、その間1日たりとも充実感を

おぼえたことがなかったのです。何かやり残し
たものがあるような、大事なものを簡単に捨て
たような気がずっとしていました。あのころは
大学を卒業したばかりでまだ若かったから、理
想ばかりで現実を見る余裕がなかったんでしょ
うね。でも学校を離れている間に、現実を無視
した理想はありえないことに気づいたんです。
そして、離れてはじめて、やはり自分には学校
が一番合うんだと気づくことができたし、現実
に向き合う姿勢ができあがったんだと思いま
した。私はこの仕事を20年以上続けています。教
師という仕事は、大変なときもありますが、と
てもやりがいのある仕事ですよ」

5. 教師への聞き取りが学生に与えた影響

レポートを出す前から「教職研究」の授業で教
師について語ってきたし、新採用教師や中堅教
師の様子を生々しい映像で見せてきたのだが、
いま一つ響いていなかったようだ。それが聞き
取りをくぐることによって、教師という職業が
実感として身近に感じられるようになったよう
である。ここに、教師への聞き取りが学生に与
えた一つの影響をみることができる。学生の感
想を紹介しよう。

「今回小学校教諭のインタビューをしていき
ましたが、外からみているだけではわからなかつ
たことが開けたことは、とてもためになりました」

「いままでの学校生活のなかで『先生は大変
だ』ということは感じていたものの、どこかで
他の職業に比べれば甘い部分があると思ってい
た。だが、このレポートをとおして実際の現状
をまったくわかっていなかったんだとつくづく
感じた。そして、自分がどれだけ先入観を持っ
て教師を見ていたかがわかった」

「正直に言って、今回の課題には少し疑問を
感じていた。ビデオを事前に見ていたし、小・
中・高校と学校の先生を見てきたからこそそう
なりたいたと集まってきた（受講した）授業だ
と思っていたので、あらためてインタビューをす
る必要はないと思っていた。しかし、実際の現

場で働く教員の空気は、生徒としてその学校に在学していたときの、生徒の視点からとは違ってみることができ、改めてちがった角度から教師という職業を学ぶことができた」

「すでに教育実習を終えているので、教員の職務内容や職場の雰囲気などは体験済みであり、ある程度はわかっているつもりであったが、実習生と実際の教員とでは、やりがいや苦勞の質がちがうということ、改めて感じた。教員という仕事を楽しむことができないければ、教員という職業についてはいけないのではないかと考え、はたして自分は教員になれるのかということ、改めて考えるいい機会になったと思う」

二つには、在学のときにお世話になった、あるいは教師志望のきっかけになった先生にインタビューした学生の感想に見られるのだが、これまでは気づかなかった学校と教師の姿に気づき、在学当時の思い出とともに教師という職業のありようが深く刻み込まれた、ということがある。

「聞き取りにいったときに、高校生のときの視点とは違った視点で先生を見ることができたように思う。高校生のときは感じていなかったけれども、私たちが何ごともなく学校生活を送れたのも、教師やその他の学校関係者の支えがあつてのことだったことに気づかされました」

「高校を卒業して以来連絡を取ることもなかった先生に突然電話をしてインタビューをさせていただいたのに、快く承知してくれた先生にとっても感謝している。教師になりたいと思った人柄のおかげだろうか、このインタビューをしたことで私はいままでよりもっと教師という仕事につきたいと思うようになった。／しかし、インタビューしてみて本当の教師の姿が見えたような気がして少し不安でもある。『教師は体力勝負』と言っていた先生の言葉や、授業以外の時間はくつろいでいるとばかり思っていたが、とんでもなく忙しい仕事だということに気づき、私にできるだろうかと思う。今教師になっている人たちはそういう気持ちを持ち切って教師に就いているのだから、私も負けてはられないと思った。／まさか恩師にこのようなイン

タビューができるとは思っていなかったのも、とてもよい機会が得られてうれしかった。大学へ入学してから教師になりたいという思いが少し薄れていたのをそれを思い出すいいきっかけになったし、前よりも教師になりたいと思うようになった」

「インタビューをするために母校にいくと、何人かの先生が私のことを覚えていてくれて、気軽に声をかけてくれたことがすごくうれしかった。直接授業を受けていない先生でも卒業して2年近くたっているにもかかわらず、私を覚えていてくれたことには驚いた。私は、今回の取材を通して、教師という仕事の大変さを改めて感じたと同時に、私もこんな先生方の仲間入りをしたいという気持ちがさらに膨らんだ」

三つには、言葉で明確に指摘しているものは少ないが、教師の語りを聞いて、苦勞と喜びの表裏一体性という教師の職業の特質に気づいている者も生まれているということである。このことは次の感想に現れている。

「教師という職業は、苦勞と喜びがとなりあわせの職業だと思いました。人間相手の職業なので気持ちが通じ合わなくて苦勞もたえないけれど、その分生徒とわかりあえたときの喜びは計り知れないものだと思います。その気持ちが忘れられなくて、つらくても教師を続けていられるのかなと思いました」

「私たちはいま教師をめざして勉強していますが、実際にこんにち教師として働いている人々は、その勉強からは学ぶことのないさまざまな問題や苦勞をかかえていることもわかり、その反面、それらの苦勞を吹き飛ばしてくれるすばらしい経験もたくさんしていることもわかりました」

6. 教師にとって聞き取りされることの意義

インタビューした学生からすると、このような聞き取り取材は迷惑ではないかと思っていたのだが、意外に好意的に受けとめられていたことに驚いていた。

ある学生は「知り合いの教師の方にお願いす

る前は、インタビューといっても大学講義のレポートのためだから引き受けてくれてもまじめに答えてくれる事はないだろう、とっていました。しかし、いざその方に会って話をしているうちに本当にまじめに私の答えてくれたことがとても印象に残っています」と書き、「話のはじめのうちは笑いながら話をしていましたが、教師になるきっかけや学校の問題などの話になるとすごくまじめに語りかけてきました。好きで教師になり、希望を抱いていた学生時代とはちがって現場はさまざまな問題があり、外から見るだけではなかなか気づかないことがある、と教えてくれました。しかし、多くの生徒と関わって生徒に希望を持たせてあげたい。その言葉には力強い意思を感じました」とインタビューの様子とそこから感じ取ったことを書いている。

また、インタビューを快く承諾してくれた先生に対して、取材を終えて、別の学生は「気になったことがある。先生は私のインタビューの中で『卒業生から便りがきたときは教師をやった良かったなあと思う』とおっしゃっていたが、では私がこうしてインタビューをしに母校にきたことも良かったと思っているのだろうか？そのことについては、私自身聞くのが恥ずかしかったので聞くことができなかった」と書いている。その先生に聞かないとわからないが、インタビューに訪れたことを喜んでいと推測される。

インタビューされる教師にとって、この聞き取りはどのような意義を持つのか。この点について高野和子は、明治大学の学生のレポートをもとに、「教師たちにとっては、教え子が聞き取りの対象として自分を選んで訪ねてきてくれたこと、子どもだった相手が自分と同じ仕事をめざして（あるいは少なくとも視野に入れている）自分の仕事について本格的に聞き、レポートにまとめようとしていること。こういうこと自体がよろこびだという発言が何人もの教師たちから出されていた」ことを紹介し、山崎準二の「語る事が教師のアイデンティティの確立・再定義の契機とプロセスになる」という指摘⁽²⁾を取り上げながら、「小・中・高の教師にとつ

て聞き取られることがよろこびとなりアイデンティティを固めるきっかけになるのであれば、大学教師はそのような機会を設定することによって教育実践仲間にエールを送っていることになる」と述べている。⁽³⁾

今回の試みは、学生だけではなく、インタビューされる教師にとってもよろこびであり、励ましになるということも、私も学生の「感想」をとおして気づかされた。もっとも、レポートを読んでいくと、教師の語りが「自分のこれまでのライフコースを整理して現在の位置を見定め、課題と見通しをつけていく」（山崎準二）のではなく、教師としての「心構え」と「教訓」を理想論的に語っている事例もいくつか見られた。このちがいは、おそらくその教師が取材の学生に心を開いていたのか、対等平等な関係で話していたのかの問題が潜んでいるように思われる。その点で取材にあたってはもっと細かな配慮と注意が必要だろうと思われるが、教師へのインタビューという今回の課題には高野和子の述べたような意義があることを、授業担当者として押さえておきたいと考えている。

注

- (1) 2001年10月8日に開催された第1回教師教育実践ワークショップ（場所：東京学芸大学、主催：東京学芸大学教員養成カリキュラム開発研究センター）で、「教職の意義等に関する科目」の実践交流がおこなわれた。そのときに資料として提出された、学校教師・教育者に聞き取りを行ってレポートを作成するという高野和子のレポート要項には啓発された。このことが今回の追実施につながった。
- (2) 山崎準二『教師のライフコース研究』創風社、2002年、366頁。
- (3) 高野和子「教師のよろこび再考——学生による聞き取りを通して——」、『教育』2003年1月号、16頁。